

# 「甲府徽典館」の著者内山崑について

A NOTE ON THE AUTHOR OF “Kofu-Kitenkan (甲府徽典館)”  
TSUTOMU UCHIYAMA (内山崑)

成瀬哲生  
Tetsuo NARUSE

## 1. はじめに

江戸期の徽典館関係の資料は、徽典館（師範・中学）が明治16年（1883）に火災に遭ったため、殆んど残っていない。『山梨大学学芸学部沿革史』（昭和39年6月）によれば、1月29日午後6時頃本館から出火し、由緒を語る貴重な文書を多く失ってしまった。そのため、内山崑「甲府徽典館」（『甲斐志料集成』第10巻及び『甲府市史』史料編第4巻近世Ⅲ所収等）が江戸期の徽典館を知るための主要な資料として使われてきた。

内山崑「甲府徽典館」について、『甲斐志料集成』（昭和9年11月）は、「本書は甲府徽典館の晩年に学びたる著者が、事蹟の湮滅をおそれ体験と資料とを総合して稿を起せるものにして、最初に沿革を叙し、学頭の氏名・略歴を掲げ、試験の状況を記し、其の当時の試験問題並に答案例まで示されたる貴重な教育資料也。著者内山氏は永く甲府穴切町辺に居住せられたりとも伝へられ居るも、その伝記を詳かにせず。」と、その内容と著者について説明している。

『甲府市史』（昭和62年3月）は、『甲斐志料集成』を襲い、「内山は、徽典館の終末近く、同館に学び、その事跡の消失を憂い、稿を起したもので、当時の試験問題や答案例まで記されていて貴重な資料である。内山は穴切町辺に居住していたという以外に伝記は不明。」としている。

このように、これまで伝記が不明のままとされてきた、「甲府徽典館」の著者内山崑について、新たな知見が得られたので、ここに報告したい。

## 2. 経緯

国会図書館の近代デジタルライブラリーで「内山崑」を検索すると、田辺太一校閲・内山崑著の『弓術新書』（博文館 明治39年5月）が得られる。国会図書館の「著者標目よみ」は「ウチヤマ、ツトム」。

田辺太一（1831～1915）は、現在でこそ一般的には『幕末外交談』（富山房 明治31年6月、平凡社の東洋文庫に坂田精一訳・校注本がある）の著者としてようやくその名が知られているに過ぎなくなっているが、幕末明治の激動期に外交畑を歩き、元老院議員、貴族院勅選議員にも選ばれている。当時においては、旧幕臣中の著名人にして、且つ1900年代（明治33年が1900年）ともなると、恐らく徽典館学頭の中で唯一の生存者であった。

その田辺太一が『弓術新書』を校閲しているということは、崑がさほど多くある名とは思えないだけに、『弓術新書』の著者内山崑と「甲府徽典館」の著者内山崑とは同一人物ではないかとの推定を促す。

『弓術新書』の著者内山崑は、凡例で「余が幼年の師は旧幕府の旗本鳥居敬之丞先生とす」と述べている。鳥居敬之丞は、国立公文書館のデジタルアーカイブ・システムで、嘉永6年（1853）には甲府勤番組頭であったことが確認できる。また国立公文書館のデジタルアーカイブ・システムでは、静岡県土族租税寮十四等出仕内山崑（明治6年）も検索できる。

明治維新によって徳川家が一時的に静岡藩となったため、廃藩置県(明治4年)後も、主家に従った旧幕臣は、戸籍上静岡県士族と記されていることが多い。静岡県とあっても必ずしも静岡で生まれ育ったことを意味するわけではない。

直感的には、「甲府徴典館」の著者内山勗、『弓術新書』の著者内山勗、静岡県士族租税寮十四等出仕内山勗、すべて同一人物である可能性が高いと思われる。しかし、決め手となる確証が得られない。あくまで間接的な状況証拠であり、同姓同名ではないと言い切ることができないからである。

幕末・明治の研究を目的とした雑誌の細目を集成したものに、柳生四郎・朝倉治彦編『幕末明治研究雑誌目次集覧』(日本古書通信社 昭和43年7月)がある。凡例には「重要なものは、これに尽くされていると言ってよい。」とあり、旧幕臣について調べる場合にも、ポータルサイトの役割を果たす。十八誌が収録されている。収録されている雑誌の目次を目で追っていただくだけでも、徴典館学頭の研究に必要な不可欠な文献ではないかと思われる表題と著者の名にたびたび出会う。しかし、どの雑誌も揃いで現物購入は、ほぼ不可能である。たとえ古書市場に出たとしても、とても手が出せるような価格ではあるまい。ただ一部の雑誌は、その史的価値の高さから復刻版が出されている。

平成18年度「戦略的(公募)プロジェクト経費」によって、旧幕臣との関係が深い「同方会報告・同方会誌」、「旧幕府」、「江戸」の三誌の復刻版を古書で購入することができた。内山勗の新たな知見は、以上の経緯でもたらされたものである。

### 3. 内山勗について

『幕末明治研究雑誌目次集覧』の「江戸」の目次を追っていくと、第6巻第4綴(第24号 大正8年8月23日)に「林衡口授・佐藤坦記 初学課業次第(豊島住作氏蔵)」とあり、林衡は林述斎、佐藤坦は佐藤一斎であるから、徴典館ではなく昌平校のカリキュラムに関する文献であるが、昌平校の分校である徴典館においても準拠されたに違いないので、参考に資するはずと考えた。そして、復刻版の「江戸」(大久保利謙編輯 立体社)第2巻幕政編(二)所収によって、ようやく「林衡口授・佐藤坦記 初学課業次第(豊島住作氏蔵)」を読むことができた。

「林衡口授・佐藤坦記 初学課業次第(豊島住作氏蔵)」は、冒頭から目を疑うような一文で始まっていた。冒頭に付された一文を、原文に訓読と注釈を付して引用する。ただし引用にあたっては、和文漢文を問わず、原則として常用漢字体を用い、仮名も通行の字体に改めた(以下同じ)。

#### 初学課業次第複写之記

余去年就職于上野東照宮也。朝夕奉祀之餘。將整理其所蔵什宝及書籍。一日開其書筐。則為蠹蝕者不鮮矣。若等閑經過日月。則其書恐有歸廢滅者。乃每葉以羽箒掃之。羽箒破而換者三。其書冊之多可以知也。而獲此書於其中。題曰初学課業次第。可謂學者指南車。而實為昔日在昌平校教者學者所皆取準焉。乃重録一本。以措之座右。更写二本。寄之老友豊島慎齋(住作)兄与永峯霞村(秀樹)兄。兩兄亦昌平校出身。而篤学之士也。 明治四十一年十二月 六十四翁内山勗識

#### 初学課業次第複写の記

余去年上野東照宮に就職す。朝夕奉祀の餘、將に其の蔵する所の什宝及び書籍を整理せんとす。一日其の書筐を開けば、則ち蠹に蝕せらるる者鮮ならず。若し等閑に日月を経過すれば、則ち其の書恐らく廢滅に歸する者有らん。乃ち每葉羽箒を以て之を掃く。羽箒破れ換ふる者三たび、其の書冊の多き以て知る可し。而して此の書を其の中に獲。題して初学課業次第と曰ふ。学ぶ者の指南車を謂ふ可けれども、而して實は昔日の昌平校に在りて教ふる者学ぶ者の皆取りて準とな

す所為り。乃ち一本を重録し、以て之を座右に措く。更に二本を写し、之を老友豊島慎齋（住作）兄と永峯霞村（秀樹）兄とに寄す。両兄亦た昌平校の出身にして、而して篤学の士なり。 明治四十一年十二月 六十四翁内山昴識す

去年 明治40年（1907）。

上野東照宮 上野公園（東京都台東区）内にある神社。徳川家康、吉宗、慶喜を祀る。国の重要文化財（旧国宝）。

書篋 本箱。篋は竹製の箱。

蠹 衣類や書物を食い破る虫。

羽箒 鳥の羽でつくった箒。

指南車 車上の人形が車の角度に連動する歯車によって常に南を向く仕掛けの車で、ここでは手引書の意。

昌平校 昌平黌、昌平坂学問所ともいい、幕府の学問所。国立公文書館のデジタルアーカイブ・システムによれば、「甲府勝手小普請江戸表御奉公付奉願候書付」（慶応03年07月）の関連事項に「内山安之丞学問所下番被仰付」とある。「初学課業次第複写の記」と合わせ読む限り、内山安之丞は内山昴その人であり、昴は明治以後の改名と思われる。太政官布告に「国名並旧官名ヲ通称ニ用フルヲ停ム」（明治3年11月19日）があり、安之丞の丞は、旧官名。下番は役職名。

豊島慎齋（住作） 慎齋は号。豊島住作については別稿を予定。

永峯霞村（秀樹） 霞村は号。別号に松軒。永峯秀樹（1848～1927）については後述。

篤学 学問に励むこと。

明治四十一年 1908年。

加えて「林衡口授・佐藤坦記 初学課業次第（豊島住作氏蔵）」には末尾に附載された一文がある。原文に訓読と注釈を付して引用する。

附載 橘陰内山君墓碣。君姓内山。名昴。徳川幕府世臣。考新歳。妣石原氏。弘化二年六月三日生於甲府。性恬淡忠直有才名。応試及第。明治維新移於駿河。後奉職大蔵省。晩読書賦詩囲碁善弓。悠悠自適。明治卅五年一月卅一日病死。葬谷中天王寺先塋之傍。行年六十八。豊島住作識

附載 橘陰内山君墓碣。君が姓は内山、名は昴。徳川幕府の世臣なり。考は新歳、妣は石原氏。弘化二年六月三日甲府に生まる。性恬淡忠直にして才名有り。試に応じて及第す。明治維新駿河に移る。後大蔵省に奉職す。晩に書を読み詩を賦し碁を囲み弓を善くし、悠悠自適す。明治卅五年一月卅一日病みて死す。谷中天王寺の先塋の傍に葬る。行年六十八。豊島住作識す

橘陰 号。

墓碣 墓のいしぶみ。長方形を碑、丸い形を碣という。

世臣 代々同じ主家に仕える臣。

考 亡くなった父をいう。

妣 亡くなった母をいう。

弘化二年六月三日 1845年7月7日。

恬淡 心静かで無欲。

忠直 真心があり正直。

応試 試験を受ける。「甲府徽典館并郷学校」(『日本教育史資料』第7冊・巻20・幕府領内学校)に「三年目毎二幕府ヨリ監察巡視シ学問所ニ於テ文学ヲ試業ス及第スル者ニハ幕府ヨリ目見以上ノ者ハ時服三領〔甲科〕若クハ二領〔乙科〕目見以下ノ者ニハ白銀七枚〔甲科〕若クハ五枚〔乙科〕ヲ賞与セラルハ等ノ制アリ尤モ其撰題并品評ハ江戸湯島学問所ニ於テ之ヲナス」とある。徽典館在学中の応試の可能性もあるが、徽典館への言及がなされていないので、昌平校転学後の応試のようである。昌平校における学問吟味の及第者名簿である「昌平学科名録」(立体社版「江戸」第2巻幕政編二所収)がある。「昌平学科名録」に採録されているのは元治二年(慶応元年)が最後で、「甲府勝手小普請江戸表御奉公付奉願候書付」(慶応03年07月)の関連事項に「内山安之丞学問所下番被仰付」とあることからすれば、内山安之丞(内山島)の転学以前の名簿ということになる。当然その名が見あたらない。しかし、「昌平学科名録」には、「慶応四戊辰正月 日限通り吟味モアリ読巻モアリシカ御褒美ノ沙汰ナクナキ寝入り也」とあるので、本墓碣の「応試及第」と合わせ考えれば、内山安之丞(内山島)を慶応四年正月(4月11日江戸開城、9月8日明治改元)の及第者の一人と見なすことはできるであろう。なお「昌平学科名録」を最終的に作成した駿南日々処士興(興は名で、蔵書家中川得楼の弟子、東京府南豊島郡千駄ヶ谷村在住)は、慶応四年正月の学問吟味について、次のように記している。「慶応三年ノ冬興ヘ吟味ニ出ヨト勸メシ人アレトモ氣運ヲ察スルニ中々学問吟味所ヲハアラサル故場中ニハ望マサリシ大井鎌吉ハ学校ニテ抗言シ今日悠然トシテコンナ事ヲ做シ居ル場合ニアラスト血眼ニナツテ奥村季五郎ニ論シ掛ケシニ彼レ只笑テ相手ニナラサリシ」と。奥村季五郎は、昌平校の儒者。老友の豊島慎斎(住作)と永峯霞村(秀樹)は、漢学のみならず、英学にも足を踏み入れている。内山橋陰(島)は、二人の老友とは異なる道を歩んだようである。

移於駿河 徳川家は、慶応4年(1868)5月に駿河府中藩に移封、明治2年(1869)に静岡藩に改称、明治4年(1871)7月、廃藩置県。

奉職大蔵省 大蔵省の創設は、明治2年(1869)、大蔵省の内局として租税寮が設置されたのは、明治4年(1871)、そして明治10年(1877)に租税寮から租税局となる。国立公文書館のデジタルアーカイブ・システムの静岡県士族租税寮十四等出仕内山島(明治6年)と重なる経歴である。国会図書館近代デジタルライブラリー所収の『官員鑑』等の政府職員録をあたると、明治8年に十二等出仕(租税寮)、明治9年に十二等少属(租税寮)、明治21年に属三等(大蔵省主税局)として内山島の名が見える。籍は、いずれも「シヅカ」と表記されている。明治22年(1889)以降の政府職員録(大蔵省)には内山島の名を見出すことができなかった。上野東照宮に就職する明治40年(1907)まで、二十年に近い空白がある。明治22年(1889)の内山島の年齢は、数え四十四歳、おそらく民間に職があったものと思われるが、今のところ手がかりが無い。

善弓 弓にすぐれる。『弓術新書』(博文館 明治39年5月)の著者内山島に重なる言及である。内山島には『新編弓術教範』(博文館 明治40年8月)もあり、校閲は同じく田辺太一。後者は、国会図書館近代デジタルライブラリーに未所収。前者も後者も復刻版がある。『近代弓道書選集 第1巻』(本の友社 平成14年4月)は前者を、『近代弓道書選集 第2巻』(本の友社 平成14年4月)が後者を収める。なお一部(写真等)を欠く復刻版であるが、『史料明治武道史』(新人物往来社 昭和46年7月)にも両書は収められている。

明治卅五年一月卅一日 1912年1月31日。

谷中天王寺 東京都台東区谷中にある寺。昭和32年(1957)に焼失した五重塔は、幸田露伴「五重塔」のモデル。

先塋 先祖の墓。塋は墓域をいう。先祖の墓が谷中天王寺にあるということは、もともと江戸にあった内山家が甲府番番になったという歴史があるのであろう。内山家の墓が今も残っているとすれば、内山島について更なる手がかりが得られるかも知れない。

行年 この世での年数。  
六十八 数え年。

内山島の生没年は、生年が弘化2年6月3日（1845年7月7日）、没年が明治45年1月31日（1912年1月31日）と確定できる。この生没年は、「初学課業次第複写之記」の「明治四十一年十二月 六十四翁内山島識」とも一致する。明治41年（1908）には、弘化2年（1845）生まれの内山島は、正に六十四歳（数え年）である。

「初学課業次第複写之記」と「橘陰内山君墓碣」によれば、大蔵省で役人生活を送り、その後、晩年の内山島は、明治40年（1907）に上野東照宮の職に就く。余暇の間に蔵書等の整理をし、「林衡口授・佐藤坦記 初学課業次第」を複写した。「甲府徽典館」には「明治四十一年一月」と年月が記されており、「明治四十一年十二月」の「林衡口授・佐藤坦記 初学課業次第」の複写に先立つ。二つは、同じ年の始めと終わりの仕事である。内山島にとっては、若き日の自分を振り返る一年でもあったかと思う。

内山島が上野東照宮に就職した経緯には、田辺太一との関係があるものと思われる。上野東照宮の社務所に掲示されている歴代宮司の一人に田辺太一の名を見ることができる。社務所に案内して下さった方のお話によれば、明治四十年代頃とのことであった。

内山島は、「甲府徽典館」の中で田辺太一について、「今也閑居して詩文を以て老後の楽と為し旧幕府の遺老として世に重せらる、徽典館学頭の中にて矍鑠として現存する者独此の翁あるのみ。」とその小伝を結んでいる。



島山内者編

『弓術新書』（『近代弓道書選集 第1巻』所収より）

#### 4. おわりに

内山島について、このように概略の知識が得られてくると、萩原頼平が編纂刊行した「甲斐志料集成」が内山島「甲府徽典館」の所蔵を峽雨文庫と記していることが単なる所蔵者の情報にとどまらない可能性に気づかされる。

峽雨は、山本節(1864~1938)の号、つまり内山島「甲府徽典館」の所蔵者は、山本節である。『山梨百科事典』(山梨日日新聞社)によれば、山本節は、義清神社(山梨県中巨摩郡昭和町)神官山本高城の二男。自由民権を唱え、ジャーナリストとして活躍。その後、甲府商業高校教諭。寿楽寺(山梨県中巨摩郡昭和町)に彰徳碑がある。

萩原頼平(1878~1951)は、小学校教諭を経て、山梨教育会附属図書館(甲州財閥の一人根津嘉一郎の新築寄贈、山梨県立図書館の前身)に勤務、郷土史家として知られる。昭和7年(1932)10月に刊行を開始し、昭和10年(1935)9月に完結した「甲斐志料集成」全12巻の編纂発行は、現在でも地域研究の貴重な財産である。

「甲斐志料集成」編纂事業は、内山島「甲府徽典館」を萩原頼平に提供した山本節在世中の仕事である。にもかかわらず「甲斐志料集成」には「著者内山氏は永く甲府穴切町辺に居住せられたりとも伝へられ居るも、その伝記を詳かにせず。」とあることは、編纂者である萩原頼平はもちろん、所蔵者の山本節も内山島について甲府穴切町辺に居住という伝聞以外は格別の知識を持ち合わせていなかったことを示す。逆に言えば、そんな内山島の「甲府徽典館」という特殊な原稿を、なぜ山本節が所蔵していたのか、となろう。

結論を先に言えば、内山島の「甲府徽典館」は、山本節の兄山本常磐(1850~1917)の所蔵であったのではないかと思われる。

山本常磐は、山本高城の長子。義清神社神官の父の後を継いだ。義清神社は、甲斐源氏の祖とされる源義清を祭る。「故山本先生之碑(昭和町西条 義清神社)」(佐藤八郎『山梨県の漢字碑』平成13年3月 山梨日日新聞社)によれば、「先生又善武技最精于弓術年壮学于甲府勤士能勢某極其奥妙遂為日置流道雪派師範門生数百人練達其技者頗多矣(先生又武技を善くし、最も弓術に精し。年壯にして甲府勤士能勢某に学びて其の奥妙を極め、遂に日置流道雪派師範と為る。門生数百人、其の技に練達する者頗る多し。)」とある。

内山島『弓術新書』の「序」(北原雅長)には「我友内山君は、弓術の達人なり、」また「日置流道雪派の教訓と古来の諸式とを記載せられたるなりけり、」とあり、内山島が記した「凡例」には「余が幼年の師は旧幕府の旗本鳥居敬之丞先生とす大和流なり」、「書中先師とあるは旧幕府の旗本近藤相模守直達先生とす日置流道雪派なり」、「本書は以上両師の外旗本小笠原流の達人神谷銀一郎先生其他より教授せられたる所のものを綜合して之を記述す」とある。

内山島と山本常磐とは、年齢も近く(内山が五歳年上)、日置流道雪派の弓術を通して、十分に交流のあり得た人物である。内山島が晩年に神職に就いたことも両者の関係を深めたであろう。

さて、内山島が「初学課業次第」の写しを寄せた老友であり、その内山島の墓碣を誌した豊島住作とは、誰か。

内山島が「初学課業次第」の写しを寄せた、もう一人の老友永峯秀樹(永峰の表記も通行する)は、甲斐国北巨摩郡浅尾新田(山梨県北杜市)の出身、徽典館に学び、明治維新後は、静岡藩が設立した沼津兵学校を経て、海軍教授(英語)。明治期の翻訳家として知られ、ギゾーの『欧羅巴文明史』(明治7年)、アラビアン・ナイトの初めての日本語訳『暴夜物語』(明治8年)、『華英字典』(明治14年)等がある。『欧羅巴文明史』の奥付には静岡県士族とあるが、これも徳川家が一時的に静岡藩に移封され

たという経緯に由来する。

その墓碣からも明らかのように、内山島は甲府生まれ、つまり甲斐の生まれである。もう一人の老友永峯秀樹も甲斐の生まれである。内山島の老友である豊島住作も甲斐の生まれであり、かつて徽典館で共に学んだ人物である可能性が高い。

内山島の友人豊島住作については、別に稿を改めて報告したい。

## 付記

内山島について、今後の調査に役立つかも知れないので、管見に入った他の関連資料を付記しておく。

「旧幕府第」3巻第7号（明治32年9月30日）と「旧幕府」第3巻第8号（明治32年10月30日）に分載された「ヲロシヤの荒増」は、内田島の投稿である。前書きを引用しておく。

僕頃日偶然豆州下田港に至る港は夙に世人の知る如く近世我国開港談判開始の要地にして外交歴史中始めて曙光を発せし所なるを以て嘉永癸丑年外船始めて渡来以後文書の徴すべきものを求め共惜哉翌寅年十一月四日本港非常の海嘯の為め文書悉く烏有に歸したりと云然とも幸に翌卯年中より用ひし所の諸御用日記なるものを得たり是れ固より民間日常の記事にして当時の形勢を詳悉するに足らずと雖も或は史の欠文を補ひ且当時外交上に関係せし有司の内現に生存せらるゝ者あらは庶幾此の日記より端を発し意外の好材料を得るに至らんか因て記事の浅薄なるを顧みず事の外交上に関する是を抜き之を貴社に呈す記者謂ふ宜く之を取捨せられよ之を下田行の一土産とす

明治三十年七月 内山島

日記中には岩瀬修理（岩瀬忠震）、矢田堀景蔵（矢田堀鴻）、二人の甲府徽典館学頭経歴者の名も見える。

内山島は、既述の通り、弓術・弓道関係に足跡を残している。インターネット上には、1992年10月31日に朝日新聞記念会館談話室で行われた座談会「本多流と弓術書」(朝嵐 弓道・本多流を求めて)が掲載されており、内山島の『弓術新書』について、「筆者は日置流道雪派の人ですが、本多利実翁と拮抗するような立派な射をしたといわれています。各流派の文献から必要科目を網羅、列記しているので便利です。」(発言者森岡正陽)とある。ちなみに森岡正陽『紫陽齋射学論集』(昭和47年2月)には内山島『新編弓術教範』への言及がなされている。入江康平編『本多利実弓道論集 弓道資料集第11巻』(いなほ書房 平成9年12月)によれば、本多利実(1836~1917)は、旗本出身の明治・大正期における弓界の先駆者で、一高・東大等の弓術師範として多くの弟子を育てた。

拙稿では弓術・弓道関係文献に十分に当ることはできなかった。今度の課題として明治から昭和にかけての弓術・弓道関係文献を精査する必要があるかと思う。